

Lesson 22 基礎理論 3 - モードの導入

今回はモードについて学ぼう。

僕がギターを始めたころ、メジャースケール、つまり「ドレミファソラシド」はそれほど難しくはなかった。

「これがドで…」「これがレ…あ、いやこっちだ」なんてやりながら習得した。

誰かに教えてもらうのは簡単だけど、イメージした音を自分で探しながら習得するのが大切だ。

とにかく、メジャースケールはすぐに弾けるようになった。

(1:06)

でも、僕はブルースギターリストだ。ロックもやるリズム&ブルースもやる。

だからb7コード（ドミナント7thコード）をよく使う。

「b7」と「ドミナント7th」は同じことだ。どちらもスケール上の「7番目の音」という意味。ただし、長7度ではなく短7度だけだね。

Cメジャースケールは…(1:44)「1 2 3 4 5 6 7…」「ドレミファソラシ…」だけど…

(1:54)

Gメジャースケールで考えてみよう。

まずG7コードがこれだ。

これはGメジャースケールの7番目の音(F#)が半音下がっている、つまりFになっているコードのこと。

Gメジャースケールを弾いてみるよ。

-playing(2:13)-

こう（4弦4フレット）だとメジャー7th(F#)、でもこう（4弦3フレット）すると半音下がってb7(F)だ。

-playing(2:23)- （ドレミファソラシ…メジャー7thではなくb7だよ！）

(2:48)

ビギナーのころこのスケールを発見した時、呼び名が分からなくて「G7スケール」なんて呼び方をしていたよ（笑）G7上で使えるスケールだからね。

後に、このスケールはCメジャースケールを、その5番目の音である「ソ」からスタートさせたスケールと同じなんだということを学んだ。

（訳者注：勘違いしやすいが、あくまでもCメジャースケール、つまり「ドレミファソラシド」の5番目の音（ソ）から続きのCメジャースケールを弾いて行くということ。それがそのまま7度をフラットさせたGメジャースケールの構成音と同じになるということ）

実際には「G7スケール」なんていう呼び名のスケールは存在しないんだけど、この考え方が「モード」に繋がっている。

今やっているG7というのはKey in CにおけるVコード（ドミナント）だ。

(3:59)（Cダイアトニックコードは）Iコード、IIコード、IIIコード、IVコード、Vコードだったね。

この5番目のVコードのルートである「ソ」をスタートとして「ソラシドレミファソ」という風に、つまりCメ

ジャースケールを「ソ」からスタートして弾けば、それが結果的に7度をフラットさせたGメジャースケールになるというわけ。

別の言い方をすると、Cメジャースケールと7度をフラットさせたGメジャースケール、つまり僕が名付けた「G7スケール」の構成音は全く同じということ。(始まる位置が違うだけ)

(4:32)

今回はDmの場合を考えてみよう。

これがCコードで、これがDm(Cメジャースケールの2番目のダイアトニックコード)だ。

この時のスケールは何だろう？

-playing(4:48)- (TABLATURE 参照)

誰かがDmコードを弾いていたら僕はこのスケールを使って何か弾くという具合だ。

-playing(5:00)-

このスケールはCメジャースケールの2番目の音からスタートさせたスケールという言い方が出来るね。

(訳者注: 前述の「G7スケール」の考え方と同じで、Cメジャースケールの2番目の音「レ」をスタートとして「レミファソラシドレ」という具合、つまりCメジャースケールを「レ」からスタートする)

-playing(5:16)-

DmはCのダイアトニックコードの2番目だね。

僕は、いわゆる「モード」というヤツのネーミングが覚えられないんだ。

ギターを始めてしばらくたってから知ったくらいさ。

他の人たちが「モード」の話をしていても、それが何のことか理解できなかった。

しかし、後年、実際にはG7スケールと、Cメジャースケールを5番目の音から弾き始めたスケールは同じもの、つまりこの2つが同じ構成音から成るスケールだと気付いて以来、合点がいったんだ。

つまり、メジャースケールの5番目の音から始まるスケール…これがミクソリディアンモードなんだとね。

その他のモードスケールは次のレッスンで紹介するよ。

#### 【注記】

- ・押弦するポイントについてRobbenは様々な言い方をしていますが、ここでは「5弦3フレットC」「6弦開放E」などの表記に統一します。
- ・翻訳モノにありがちな読み難さの一因となっている「直訳」を排除した結果、Robbenの実際の言葉とは若干違った表現になっている箇所がありますが、読者にとってのストレスのない自然な理解を促すためのものであり、Robbenが言わんとしていることはそのままに、大局を損なうことのない翻訳を心がけました。
- ・モードの解説において「○○スケール」と「○○モード」の言葉の使い分けはせず、Robbenの言に最大限忠実に訳しながらも、より理解をしやすいように、柔軟にそれぞれを言い換えて訳しているケースもあります。

翻訳 山岸敦